

偏見・いじめ・差別

子どももを育てる大人の責任

子どもは生まれつき、偏見や人を差別しいじめの心をもって生まれてくるわけではありません。ではなぜ、子どもたちの間でいじめが広がり、社会では差別が後を絶たないのでしょうか。

先日、南部町でも講演していただいた鳥取大学教授藤井輝明さんの著書『この顔でよかった コンプレックスがあるから人は幸せになれる』（ダイヤモンド社）の中にたくさんのヒントが盛り込まれています。

藤井さんは顔に海綿状血管腫というアザがあり、子どもの頃から厳しいいじめにあわれたそうです。そのため、ご両親が気遣って小学校2年生の時に転校されます。転校先の小学校では、先生が「藤井君のアザはアクセサリー、宝物」と言って、それを理由にい

じめないよう指導していたため、学校内では全くいじめにあわなくなつたそうです。おそらく、この学校に通うすべての子どもの親が、この先生と同じ考えのもとに、家庭でも子どもを指導していたのでしょうか。このことは、藤井さんをいじめから解放したばかりか、周りの子どもたちにも影響をあたえ、藤井さんのクラスは多くの教師や、医療関係者を輩出したそうです。

一方、最初の小学校の同級生は後に、「いじめをしたことをずっと後悔していた。」と藤井さんに告白したそうです。藤井さんは次のように書いておられます。

「いじめは、いじめる人も『いじめて悪かった』とトラウマを引きずって生きています。いじめられる側も、いじめる側も苦しい思いをしているのです。つまり、双方

とも犠牲者、被害者なのです。」

私たち大人は、日々の言動において知らず知らずの内に、子どもたちに大きな影響を与えています。大人が他人に対し、偏見をもった言動を繰り返していれば、子どもはそのまま影響されてしまいます。そして社会における差別は限りなく繰り返されていくのです。

藤井さんは、容貌に対する差別や偏見と闘っておられます。金子みすゞさんの詩にある「みんな違ってみんないい」と言う言葉を、まさに体を張って実践しておられるのです。いじめも差別も自分や世間一般と「違う」ものに対する偏見がもとになっています。自らの中にあるこの偏見を取り除くと同時に、子どもたちに偏見を植えつけない大人になるために、藤井さんの生き様に学ぶところは大きいと思います。



この顔でよかった
コンプレックスがあるから人は
幸せになれる
著者／藤井輝明
出版社／ダイヤモンド社
発行／平成17年